

一 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。本文中の()内の表現は、直前の語の意味を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

日本ではほとんどどこでも放っておけば草が生え、やがて木が育ち、森となる。植物にとって恵まれた国である。だから日本で生まれ育った人には、植物が育つことさえ困難なところが地球上にはたくさんあるといっても、ピンとこないかもしれない。事実私の周りにも、植物はどこだって放っておけば育つところか、根絶やしにするのはとてもたいへんだといった(1)はばかりない人もいる。

しかしこれは、日本のように植物の生育に恵まれたところに育った人にのみえることなのだ。どこでも植物が容易に育つという日本の恵みは、まず四周を海で囲まれ、全国いたるところ一年を通して植物にとって十分な雨がもたらされる、という気候の恩恵によっている。後で述べるように、(2)植物が生きていくためには、水が欠かせない。その欠かせない水が何もしなくとも雨によって十分に供給される日本は、一年中ほとんど雨の降らない砂漠など乾燥地の人々にはまことにもって羨ましい環境のもとにあるにちがいない。

砂漠のように、地球上には一年中雨がほとんど降らないか、降ったとしても数回だったたり、きわめて少雨であったり、植物がほとんど育たない地域もある。私が訪ねた広大なサハラ砂漠には一日歩いてもまったく植物に出会うことができなかった。イッカクもあつた。

それほどの大面積でなくとも、植物が育つことができないところは方々にある。コンクリートで被われた都市もそのひとつだ。

横浜に登場したランドマークタワーや周辺は巨大なコンクリートの塊が林立している。植物とはいえば(3)申し分け程度に(4)道路に引いた点線のように街路樹が列をなして植えられているだけだ。ここは(5)都市砂漠の見本といつてよい、殺風景な光景が広がるだけに私にはみえるのだが、乾燥地の人が豊潤な緑あふれる大地にあこがれるのとは逆に、日本には植物も育たぬ乾燥地にあこがれの気持ちを抱いている人も多いのであろう。

一年中雪や氷に覆われた南極や北極周辺の地域にも植物はない。海洋のまったくなにも植物を見出すことはできない。世界で最も高い山、エヴェレストの頂上は八八五〇メートルに達するが、山頂に生える植物は見つかっていない。ただエヴェレストは山頂といえども、まったく生きものがいない世界ではない。上昇気流に乗って、クモの卵やカビの胞子などが運ばれ、短期間ではあるが生きている。カビ

水は〇度で凍り、一〇〇度で沸騰する。固体、液体、気体という三つの様態を、身近にしかも日常的に目にすることができる、とてもめずらしい物質なのだ。水は温度の変化に対応して、比重も変化する。(A)また液体の水が凍って固体になると体積が増加する。北極や南極付近の海洋に浮かぶ氷山の頭の部分が海上から飛び出ているのは、凍ると体積が増える水の物理現象を如実に示している。

この体積あるいは比重の変化が植物の暮らしに及ぼす影響はきわめて大きい。(B)影響が大きく及ぶ原因は、植物のからだをつくる細胞がその周囲を細胞壁という緻密で可塑性(変形しやすい性質)の乏しい構造物で囲まれており、動物の細胞と異なり柔軟性がほとんどないことにある。(C)そのため細胞の内部にある水が凍ってしまうと、細胞壁は細胞内部の体積の増加に耐えられず細胞自身も破壊されてしまうのだ。

氷が融けて液体の水に戻っても、壊れた細胞はもう二度と活性は回復することなく死滅してしまう。(D)細胞の破壊した野菜は二度と水気が戻ることなく、しなびた状態のままになる。

気温が氷点下になる地域に生きる植物は、細胞の凍結を防ぐ何かしらの工夫なしには生きていくことはできないのだ。量的には水とは比べものにならないくらい少ないのだが、タンパク質も、生物の一員である植物にとって、欠くことのできない重要な物質である。タンパク質は水とは異なり、ある温度を境に変性といってその物理的・化学的性質が変わってしまう。植物が必要とする機能を失ってしまう。なかでも固まってしまふ凝固は致命的な変化であり、多くのタンパク質では六〇度くらいから凝固がはじまる。凝固点を超える高温環境も特殊なわけなしには生存が許されない環境なのである。

上記のことから、水の氷点とタンパク質の凝固点の間の温度環境だけが植物の生存を許容する温度範囲であることがわかる。もちろん様々な工夫によって氷点下になっても生存を続けることができる生物もある。一〇〇度を超す温泉水の中で生きるイオウバクテリアなどもいるが、これらは例外的なものである。ほとんどの植物・生物はこの生存が許容される範囲の低温側か高温側、あるいは中間の温度帯を生活に最適な温度環境として、生計を立てるべくかたちや生理機能を適合させている。

植物の生存は水と温度に大きく左右されるという構図の根源はここにあるということができよう。

先にもふれたが植物は大地に根を張って生きている。エサを求めて動きまわる動物とは大きなちがいである。そこでつくりあげたのが生存に必要な物質を根を通し

などはしばらくは生息し続けることがあるようだ。

(6)こうした植物がみられない、あるいは育たない地域や場所を一覧することで何が植物の生息を困難にしているかを考えてみるができる。その「困難にしている」ものは植物の生存を左右する決め手(条件)だといいかえてもよい。ここにあげた例からみえてくるのは、最初に述べた水のほか、(7)根が張れないところも植物は育たない、ということではないだろうか。砂が動いてしまふ砂漠も都市のコンクリートで固められた道路も、雪や氷で覆われた極地やエヴェレストの山頂も洋上もすべて、植物が根を張って暮すことを許さないのだ。

樹齢一〇〇年を優に超えるスギやイチヨウなどの大木に限らず、道端に生えるハコベやオオバコなどの草も含めて、ほとんどの植物は大地に根を張って暮している。それがゆえに植物は簡単には移動できない。その点は葉に移動できる動物と根本的に異なるところだ。たとえ現在暮している場所が、暮しに不向きになったからといって他の場所に移動することは植物には叶わない。移動するには種子が、親元(母株)から離れたところで発芽定着するのを待つしかない。自分の代では移動できないのが植物であり、哺乳動物や鳥類などのように日々大地や空中を動きまわって暮す多くの動物とは大ちがいである。まさに植物の植物たる(8)ゆえんは、大地に根を張って暮し、移動できないことにあるといつてもよい。

植物のからだはほとんど水からできている。このことは植物に限らず動物にも共通する。水は生きもののからだをつくるうえでも欠かせないがそれだけではない。動物の一員である私たちにとつても、生活のため日々必要とする生理活動では、多くの必要物質が水に溶けた状態でからだのすみずみに運ばれていくし、老廃物も水とともに体外に排出される。水が欠乏すれば、たちどころにからだのあちこちで生理作用が(9)シショウをきたしてしまうのだ。

水が生きていくうえで不可欠な物質であることは人間を含めあらゆる生きものにあてはまる。毎日大量の水を飲んだり、水分を大量に含んだ食物を通して、私たちも水分の補給に努めている。

だが、植物にとつて、水が必要不可欠な重要な物質であるのは円滑な生理活性を維持するだけのためではないのだ。水は、後で詳しく述べる、光合成による炭水化物の生産にも欠かせない必須物質のひとつなのである。光合成は、大気中の二酸化炭素(炭酸ガス)と水の化合によって、あらゆる生きもののエネルギー源となる炭水化物を生産するしくみである。炭水化物の生産では、水は必要不可欠な原料のひとつであり、植物に水はこの点でも欠くことのできない重要性をもつ物質なのである。まさに水あつての植物なのだ。

て吸収するしくみである。タンパク質の合成に欠かせないチッ素、細胞内への物質の取込みの役目を(10)二ナうポンプ輸送に欠かせないカリウム、生きものが用いる通貨にもたとえられるATPの素材であるリンなど、光合成で自ら生産できる炭水化物と二酸化炭素、酸素を除く、ほとんどすべての物質(総称して無機物という)を植物は根を通じて大地から吸収しているのだ。

植物が必要とするこうした無機物を豊富に含んでいる土(土壌)を一般には肥えた土、土地を肥沃地といい、反対に有用な無機物が欠乏する土壌が堆積した土や土地を痩せ土、痩せ地といっている。(X)的に植物を栽培する農業では、植物にとつて栄養分ともいえる無機物を(X)的に供給する。それが肥料である。

植物が生きていくうえで欠かすことのできない条件は、根を張る大地、水と温度、それに植物が必要とする無機物が必要量手に入ることである。

地球上にはこの条件さえも十分には満たすことができない環境の場所も少なくないのが現実なのだ。このような環境を植物にとつての極限環境と呼ぶことにしよう。植物にはこうした極限の環境下でも生存していける得意技(戦略)を発達させているものも少なくないのだ。植物は未だ地球の表面全体を被い尽くすまでは至っていないが、極限の環境下で暮す植物のたくましさやその得意技には度肝を抜かれることが多い。地球上に多様な植物が暮すのは、極限環境にさえ進出し繁茂した適応のための戦略の結果であるといつてよい。

(大場秀章 著『はじめての植物学 植物たちの生き残り戦略』より)

問1 太線部a「イッカク」、b「シショウ」、c「二ナ(う)」をそれぞれ漢字に直しなさい。

問2 傍線部①「はばかりない」、③「申し分け程度」、⑧「ゆえん」の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|-----------|----------|---------|
| ①「はばかりない」 | ア 遠慮しない | イ 重視しない |
| ウ 動揺しない | エ 心配しない | |
| ③「申し分け程度」 | ア 均等 | イ 半分くらい |
| ウ 言ったとおり | エ ほんのわずか | |
| ⑧「ゆえん」 | ア 短所 | イ 運命 |
| | ウ 理由 | エ 美点 |

問3 傍線部②「植物が生きていくためには、水が欠かせない」とありますが、水が欠かせない活動のうち、植物にだけ当てはまるものを1ページの本文中から十三字で抜き出し、答えなさい。

問4 傍線部④「道路に引いた点線のように」という表現は、どのような様子をたとえたのですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 木々が道路わきにまばらに並んでいる様子。
イ 木々が道路に沿って等間隔に並んでいる様子。
ウ 道路に沿って木々が生氣なく並んでいる様子。
エ 様々な種類の木々が道路わきに並んでいる様子。

問5 傍線部⑤「都市砂漠」という表現から読み取れる筆者の思いを説明したものと、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 植物に恵まれた日本の環境にあきたらず、あこがれの乾燥地と魅力ある都市を一つに混ぜ合わせてしまう日本人の欲深さをなげいている。
イ コンクリートで覆われた都市も、植物の生育に適さない点で、植物が少ない地域に住んでいる人の気持ちを理解するのに役立つと考えている。
ウ 植物に恵まれた日本の環境をわざわざコンクリートで被い、植物が育たない環境に変えてしまう日本人の意識の低さに対し、皮肉をこめている。
エ コンクリートで覆われた都市も砂漠も、観光地として人々が多く集まるという点において共通しており、それぞれ魅力ある土地の代表ととらえている。

問6 傍線部⑥「こうした植物がみられない、あるいは育たない地域や場所」について、次の各問に答えなさい。

- (1) 「こうした植物がみられない、あるいは育たない地域や場所」の例として、筆者はどのような地域や場所を挙げていますか。その例を全部含んだ一文を本文中から抜き出し、始めの五字で答えなさい。
(2) 「こうした植物がみられない、あるいは育たない地域や場所」と対比されている表現を傍線部⑥以前の本文中から十字で抜き出し、答えなさい。

二 次の文章は、あさのあつこ著「かんかん橋を渡ったら」の一節です。本文を読み、後の問に答えなさい。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

津雲の町で育った中学一年生の石鐘真子は、『ののや』という小さな食堂を営む父親と二人で暮らしてきました。三年前、父親は『ののや』の常連客でありこの町でよく知られた元ヌードダンサーの奈央さんと再婚し、家族三人で新しい生活を始めました。

津雲の人たちは、出て行くときも帰って来るときもかんかん橋を渡る。
うちもいつか、そんな時が来るんやろか。

真子は考える。

ポストンバッグを提げて、かんかん橋を渡る。橋のたもとで見送ってくれるお父ちゃんと奈央さんに背を向けて、津雲から出て行く。

考えても、考えても、リアルには感じられない。津雲で生まれ、津雲で育った。他の場所ですべていくことなんて、できるんだろうか。

真子は津雲が好きだった。『ののや』が好きだった。『ののや』のお客さんたちが好きだった。駅前の商店街が好きだったし、津雲の温泉が好きだった。でも、都会にも住んでみたい。津雲以外の世界を見てみたい。知らない何かに触れてみたい。いつか、いつか、かんかん橋を渡って、見知らぬどこかへ旅立ちたい。
そんな風にも思うのだ。

鮎美のように、はつきりした夢でも目標でもない。仄かな願望のようなものだ。

いつか、津雲を出て行く。そして、いつか津雲に帰って来る……だろうか。

「よっ、おはよう」

少年がすれ違いざまに声を掛けてきた。

「あつ、おはよう」

答えた後、真子は頬がほんのりと熱くなるのを感じた。

岩鞍くんだった。

岩鞍友哉くん。幼稚園、小学校、中学校とずっといっしょだった。岩鞍くんの家は二十頭の牛と三頭の豚を飼っている畜産農家だ。

一度遊びに行ったことがある。茶褐色の艶やかな体色をした牛たちが、ずらりとならんで、干し草を食んでいた。その大きさに驚き、こわごわ触った体の熱さにまた、びっくりした。

「優しい目え、しとるやろ」

問7 傍線部⑦「根が張れないところも植物は育たない」とありますが、次の文は「根が張れないところ」で植物が育たない理由を説明したものです。空欄に入る適切な表現を、2ページの本文中からそれぞれ指定の字数で抜き出し、答えなさい。

植物は、「A(十二字)」動物と違って、「B(十八字)」ため。

問8 本文には次の一文が脱落しています。補充する箇所として最も適切なものをA～Dの中から選び、記号で答えなさい。

試みにコマツナのような葉ものの野菜を冷凍庫にまる一日入れてみるとよい。

問9 本文中の二か所の空欄Xに入る語として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 集団 イ 人間 ウ 自発 エ 感覚 オ 人工

問10 本文の特徴を説明したものとして正しいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 植物が生育する条件について考察し、植物が生きる上で何が必要なのか、その条件を一つ一つ挙げていく。そして、それらの条件が必要とされる理由を身近な例や分かりやすいたとえを用いて説明している。
イ 誰もがふだん不思議に思っている植物の生育環境について、動物との相違点や人間との共通点にふれながら、論を展開している。そうして日本がいかに植物の生育に恵まれた環境であるかということを証明している。
ウ まず日本の環境についてふれ、それをきっかけに植物の育ちにくい環境へと目を向けながら、植物の生育条件を探っている。立てた仮説にもとづいて実験し、具体的な数値を示しながら丁寧に結論を導き出している。
エ 植物の生育が難しい環境にふれながら、生存していくのに必要な条件を浮きぼりにしている。一方で、その条件を満たしていない極限の環境でも、何らかの工夫によって生存を可能にしている植物の存在にもふれている。
オ 恵まれた日本の環境と対比させる形で、植物の生育に向かない環境を順に紹介している。あえて専門的な用語を多用することで説得力を高め、植物の生育に欠かせない条件に対する筆者の主張をより明確に打ち出している。

岩鞍くんがにっこりと笑う。得意げな笑みだった。

「うん。優しい目えやねえ」

「牛がこんなに優しい目えしとるって、知らなかったやろ」

「うん、知らなかった」

岩鞍くんの手が牛の鼻をそっと撫でる。① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

「ユウちゃん(そのころは、ユウちゃん、マコちゃんと呼び合っていた。今は苗字でしか呼ばない)、ほんまに牛が好きなんやね」

真子が言う。岩鞍くんはまた、笑みを浮かべた。今度は照れたみたいな笑顔だった。② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

「マコちゃんも触ってみ」

と、少しぶついたらばうな口調になった。

「触ってもええの？」

「ええよ。マコちゃんなら触っても、牛も怒らんと思うし」

真子はそっと手を差し出し、牛の鼻先に触れてみた。桃色の舌がぐくくと伸びて来て、指を舐める。大きな黒い目がちらりと真子を見た。

牛があんなに綺麗で、ゆげな目をしているなんて、そのときまで知らなかった。「ガンコもここにいたの？」

岩鞍くんが作文に書いた牛のことを尋ねた。売られていった牛だ。③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

に、心臓が縮こまった。ガンコは岩鞍くんがお父さんと一緒に生まれたての赤ん坊のときから育てた牛だ。

そのガンコを肉牛として、シュツカしたときのことを岩鞍くんは作文に書いたのだ。

県のコンクールで金賞を受けた作文に、岩鞍くんは寂しいとも、悲しいとも、一言も書かなかった。そんなX感情ではなく、堂々とした立派な肉牛だったガンコに対する尊敬の想いが溢れていた。

誇り高く、潔い作文だと、真子は感じた。

でも、自分の育てたガンコを手放したとき、岩鞍くんの中に風が舞ったはずだ。冷え冷えと身体が芯まで染み入る風が吹き抜けたはずだ。

寂しくないわけがない。悲しくないわけがない。辛くないわけがない。

それなのに、無遠慮に尋ねてしまった。恥ずかしい。けれど、岩鞍くんは、「うん、おったで」

と、あつさり答え、牛舎の隅を指差した。

「あそこに、おったんや」

の先を見詰める。赤いチョークで少しかだけ汚れている。いつの間に、どこでついたのだろう。

「何や、その言い方」

岩鞍くんは眉間に皺が寄った。

「え？ 別にいい？ 仲良しやなあって言うただけや」

林葉くんは、まだにやにや笑っている。

「おれは、石鎚に挨拶しただけや」

「へえ、そうなんか。ラブラブに見えたけどな。岩鞍、嬉しそーな顔して『よつ、おはよう』って。ほら、こんな顔」

林葉くんが指で目尻を下げ舌を突き出す。岩鞍くんの頬がみるみる紅色に染まった。

「林葉、おまえな」

「ええかげんに、してや」

岩鞍くんが林葉くんに詰め寄るより先に、鮎美が二人の間に割って入った。

「林葉、あんた、まだ他人をからこうて喜んでるの。いつまでたっても最低男のままだね」

鮎美が、林葉くんを呼び捨てにする。中学生になってから、鮎美は男の子を呼び捨てにするようになった。呼び捨てただけでなく、睨みつける。迫力のある眼つきだった。

その眼つきで気が付いた。

小学生のとき、鮎美をからかい続けたグループの一人が林葉くんだったのだ。

「何でもかんでも、すぐに他人をからこうて。馬鹿やないの。馬鹿やわ」

鮎美の迫力に気圧されたのか、林葉くんが唇を結んだまま無言になる。

岩鞍くんは、口を半ば開けて鮎美ちゃんを見詰めていた。鮎美ちゃんは、誰の視線もまったく気にしていなかった。ぐいっと顎を上げ、胸を張る。何だか、凜々しい。凜々しい顔つきで、鮎美が言う。

「真子ちゃんは、うちの友だちなんやからね。からこうたりしたら承知せんで」

⑧ なんと後ろ頭を叩かれた気がした。鮎美の横顔を見詰める。

鮎美は堂々と立っていた。堂々と立って、真子をかばってくれている。自分はどうだったろう。

鮎美が男の子たちからかわれていたとき、こんな風に楯になれただろうか。慰めはした。男の子たちに憤りもした。けれど、今の鮎美のように胸を張り守り通そうとしたのだろうか。

できなかった。

そこには、他より一回り小さな若い牛が柵に繋がれ、こちらを見ていた。

「ガンコ二世や」

「ユウちゃんが育ててるん？」

「そうや。お父ちゃんと一緒に育ててる」

岩鞍くんは胸を張った。金賞の作文のように、誇り高く堂々としてっていると、真子は思った。見慣れた岩鞍くんの顔が眩しかった。

中学生になってから、他の男の子たちとはあまり口を利かなくなっただけで、岩鞍くんだけは、普通におしゃべりができる。おしゃべりといっても、二言三言、言葉を交わすだけだ。

「ガンコ三世（ガンコも三代目になっていた）元気？」

「おう、でっかくなったで。見に来るか」

「行きたい。行ってもええの」

「いつでも、来いや。今度は、ミミ四世も見せたるわ」

「ミミ四世って？」

④ 「豚の赤ん坊。先週、生まれたんや」

⑤ そんな会話だ。そんな会話が楽しい。

真子は岩鞍くんが好きだった。

岩鞍くんは、かんかん橋に似ている。何があっても変わらず、そこにある。津雲の町も、人々も、真子自身も変わって行くけれど、この世界には決して変わらぬものもまた、存在するのだ。

そう思わせてくれるのだ。

岩鞍くんといくと、心が和む。

今朝も岩鞍くんは自分から、声をかけてくれた。朝の昇降口でごく自然に「よつ、おはよう」と。

胸の鼓動が、少し速まった気がする。

「へえっ。岩鞍と石鎚、朝からラブラブかよ」

背後で頓狂な声が響いた。

振り向く。大柄な少年がにやにや笑いながら立っていた。

「林葉くん……」

⑥ 同じクラスの林葉健史だった。鼓動が動悸に変わる。

「もうすぐ夏やから、あんなし熱々にならんでくれや。気温が、さらに上がると困るで。あーあ、暑い、暑い。誰かさんたちのせいで、温暖化が進んでますう」

林葉くんが大きな手を上下に動かして、歯を覗かせた。⑦ 真子は俯き、上履き

男の子たちが傍にこないように、図書室やうさぎの飼育小屋のあたりに鮎美と一緒に逃げるのが精一杯だった。

鮎美ちゃん、いつの間にかこんなに強くなったんやろか。うちは、まだ、意気地無しのままなのに。

恥ずかしい。自分がとても恥ずかしい。

真子はまた、俯きそうになる。けれど、鮎美の一言に弾かれたみたいに顔を上げていた。

「知つとるで。林葉は真子ちゃんが好きなんやろ。だから、岩鞍が気安うに挨拶するのが気に入らんや」

は？ 何のこと？

思わず林葉くんに目を向けていた。信じられないほど、真っ赤だった。額に汗まで浮かんでいる。

「ふふん」

鮎美が鼻の先でせせら笑った。

「やっぱ、図星やったね。うち、前から気が付いてたんやで」

「ふざけんな」

林葉くんが叫ぶ。

「おれが何で石鎚なんか好きになるんや」

「そんなん、自分の胸に訊いてみればええやないの。ずっと、真子ちゃんのこと、気になってたぐせに」

鮎美がほとんど冷笑に近い笑いを浮かべた。

「そんなことあるわけねえだろう。こいつの母親、ヌードダンサーなんやぞ。裸で踊ってたんやぞ。そんな母親がいるのに、好きになんかなるわけないやろが」

林葉くんの大声が耳の中でわんわん響く。

⑨ 岩鞍くんも鮎美も動かない。固まっている。

真子も動かない。動けない。髪の前まで凍りついた気がする。

わんわん、わんわん。

わんわん、わんわん。

林葉くんの声だけが響き続ける。

「客の前で裸になって、腰振って、踊ってたような母親なんやぞ。それこそ、最低やないか」

わんわん、わんわん。

わんわん、わんわん。

奈央さんの姿が目の前を過ぎて行く。白い三角巾で髪を包みこみ、懸命にテープを拭いている。「おはよう、真子ちゃん」と笑いかけてくる。一生懸命にキャベツの千切りの練習をしている。器を洗いながら鼻歌を歌っている。

「無理して、あたしのこと。お母ちゃん、なんて呼ばなくていいからね」

真子の眼を覗き込んでそう言ってくれた。

奈央さん。

「そんな母親、恥ずかし過ぎるやろが。最低、最低、最低の最低や」

頭の中で何かが弾けた。火花が散る。

「うるさいっ」

手に提げていた通学カバンを振り回し、林葉くんにぶつかっていく。

パンッ。鈍い音がして、手のひらに手応えがあった。人の頭を叩いた感触だ。手の先がぼろりと熱くなる。

「いたっ！」

林葉くんが顔を押しえよろめいた。身体が靴箱に当たり、何足かの運動靴や上履きが床に転がった。散乱した靴の上に林葉くんが尻もちをつく。

「馬鹿、馬鹿。奈央さんは最低なんやない。何で、そんなこと言うの。奈央さんに謝れ」

手の先が熱い。頭の中も熱い。どくどくと熱が脈打つ。その熱さと脈動に突き動かされて、真子はカバンを振りおろしていた。

「馬鹿、馬鹿。あんたなんか大嫌い」

カバンの下で林葉くんの顔が歪んだ。

知らないくせに。

あんたなんか、奈央さんのこと何一つ知らないくせに。よくも、よくも、よくも……。

ガッツ。今までより硬い手応えが伝わる。

「痛いっ」

林葉くんが悲鳴を上げ、両手で顔を覆う。

「林葉」

岩鞍くんが息を詰める。

「血が！」

鮎美が眼を瞠ったまま身体を硬直させた。林葉くんの指の間から、濃い紅色の血が滴る。それは林葉くんの手の甲をくねりながら伝って行く。紅の蛇が這っているみたいだ。

「林葉、保健室や。保健室に行こう」

岩較くんが林葉くんを抱き起こす。血が滴り、コンクリートの上に染みを作る。うち、何をしたの……

手からカバンが滑り落ちる。目の前がすうつと闇に閉ざされていく。

「真子ちゃん。しっかりして」

鮎美の声が遠ざかる。音も光も真子自身も、暗く深い穴に吸い込まれていく。何もかも、消えて行つた。

(中略)

その日の夜、真子は奈央さんとお父ちゃんに挟まれるようにして、林葉くんの家を訪ねた。

津雲の南端の高台にある大きな家だった。奈央さんが予め連絡を入れておいたからなのか、チャイムを鳴らしてすぐに、林葉くんのお母さんが出てきた。

ほっそりとした美しい人で、目元がどこことなく林葉くんと似ている。小学校の参観日のとき、どのお母さんよりも洒落た服装をしていた人だ。

半透明のふわりと丸い袖のブラウスだったり、白いベルトでウエストを絞った碧色のワンピースであったり、裾にフリルのついたスカートであったり。

林葉くんと同じクラスになったとき、参観日の度に、真子は見惚れていたものだ。

「この度は、本当に申し訳ありませんでした」

お父ちゃんが長身を折るようになり、深々と頭を下げる。奈央さんも同じように低頭した。

「ごめんなさい」

真子は、本気で謝った。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい。」

眼球を押上げて涙が込み上げてくる。

零れないように、奥歯を噛み締める。

「二針、縫いました」

お母さんが自分の右目を指差す。

「瞼の上だったからよかったですもの、目に当たっていたら失明の可能性もあるって、お医者さまから言われました」

「ほんまに、とんでもないことを致しました。何とお詫びしたらいいのか……」

奈央さんが消え入りそうな声を出す。

「ごめんなさい。ごめんなさい。」

真子は胸の内での詫びの言葉を繰り返す。

不機嫌な険しい声が、お母さんの言葉を遮る。

「健史。起きて来たの」

廊下の端に、林葉くんが立っていた。照明をつけていないので、玄関から見るとそこは薄闇の溜まりのように思えた。

暗い。林葉くんの眼帯の白さだけが浮き立つ。林葉くんの眼帯姿を見て、真子は身を縮めた。自分が何をしたか、目の前につきつけられた気がしたのだ。

「熱が、九度近く出てるんですよ。縫ったりすると発熱することがあるんやて、病院で言われました」

「もうええって言うてるやろ」

林葉くんが苛立たしげに、語気を強める。

「もうええってことがありますか。こっちは被害者なんやから、言うことだけは言うとかんとあかんでしょうが」

「うるさい」

林葉くんは、ほとんど怒鳴るように言い捨てた。それから、眼帯の顔を真子に向ける。

「何で、謝りになんか来たんや」

林葉くんの左目がぎらついていて、熱で潤んでいるせいなのか、いつもの林葉くんとはまるで別の人、見知らぬ大人のようだ。

真子は思わず半歩、退いた。

「何で……林葉くんに、怪我させましたし……」

「石鎚だけが悪いわけやないやろが」

やはり、吐き捨てるような荒い口調だった。

「おれだって……調子乗って言い過ぎだし……」^①それを何で親や先生に言わんのや」

真子が保健室にいる間に、岩較くんが先生たちへきちんと説明をしてくれていた。

「岩較からは、だいたい聞いているが、石鎚としては何か言うことがあるか」

担任の八木先生に聞かれた。眼鏡をかけて優しい眼差しで八木先生は、本当に静かに草を食む山羊のような雰囲気があった。

「……何にもありません」

「そうか……、岩較の話やと林葉にお母さんの悪口を言われたそうやけど」

「奈央さん……母は関係ありません」

林葉くんは、奈央さんを侮辱した。その侮辱の言葉を誰にも伝えたくない。^②ほんの一時でも、奈央さんのことを恥ずかしいと思った真子自身を知られたくない。

真子は黙っていた。八木先生の前でも、林葉くんの前でも。

林葉くん、怪我をさせてしまつてごめんなさい。奈央さん、お父ちゃん、こんなに頭を下げてさせてごめんなさい。

「女の子のくせに、カバンを振り回すなんて、少し乱暴過ぎるんやないですか」

「はい。ほんとにおっしゃる通りです。本人も反省しておりますので、今回はどうか許してやってください」

奈央さんがまた、頭を下げる。

「真子ちゃんのこと、小学生のときからよく知ってるけど」

お母さんが、ちらりと真子を見やった。

「おとなしくて、優しく、とっても良い子だったわよねえ。そんな真子ちゃんがカバンを振り回すなんて、おばさん、ほんまのこと言うて信じられんのよ。何かストレスでも溜まってるのどちがうの」

ちらり。

林葉くんのお母さんの黒目が、今度は奈央さんに向けられる。^⑩奈央さんの頬に血の気が上がった。紅潮した顔が俯く。

違う！

真子は叫びそうになった。

違う、奈央さんのせいじゃない。林葉くんは怪我をさせたのは、あたしだ。奈央さんは関係ない。

「ごぶしを握る。手のひらが汗ばむ。」

「家族でいろいろと話し合ってみます」

真子が口を開く前に、お父ちゃんが言った。低く重い声音だった。

「わたしもこれも」

と、奈央さんに向かって顎をしゃくくる。

「自分では一生懸命にやっているつもりでも、空回りしとったところがあつたんかもしれない。これを機に、じっくり親子三人で話し合ってみます。それで、娘が二度と、他人さんを傷つけたりしないようにします」

いつもは本当に寡黙で、黙って包丁を使っているお父ちゃんが一言一言を吟味するようにゆっくりしゃべった。その傍らで、奈央さんは俯いたまま黙っている。

林葉くんのお母さんは、長いため息を一つ、吐き出した。乾いた風に似た音が漏れる。

「そうですね。まあ、そうしてもらわないとねえ。なにしろ、縫うほどの怪我をさせられて」

「もう、いいかげんにしとけ」

「もういいから、帰れ」

林葉くんが真子からすいっと目を逸らせた。

「石鎚が謝ることなんかないんや。だから、もう帰れ」

林葉くんは、横を向いたまま階段をのぼっていった。ドアの閉まる音がする。

「健史つたら……」

お母さんが、また長い息を吐いた。

「中学になってから、ほんまに難しくなつて。ろくに口もきかんし、やたら怒りっぽくなるし、困ったもんだわ」

「こまで言つて、林葉くんのお母さんは口をつぐんだ。束の間、静寂がおとずれる。」

「つい愚痴つてしまつたわ」

お母さんは髪を掻きあげ、照れたように笑った。その笑みを直ぐに消し、口元を引き締める。

「石鎚さん、息子もあ言つてますから、今画のことはもういいです。どうぞ、お引き取り下さい。真子ちゃん、もう二度とこんなことしないんよ。ちゃんと反省してな」

「はい」

真子と奈央さんが同時に、少し遅れてお父ちゃんが頭を下げた。

問1 太線部a「シユッカ」を漢字に直しなさい。また、太線部b「潔(い)」の漢字の読みを、ひらがなで答えなさい。

問2 傍線部①「それこそ、優しい優しい撫で方だった」とありますが、「それこそ」という言葉が入ることで、どのような効果が生じますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 真子も牛に優しく接したつもりでいたが、岩較くんの優しい撫で方にはとうてい及ばないということを確認に示す効果。

イ 岩較くんの牛へのしぐさが優しさにあふれている様子は、牛の目の優しさに勝るとも劣らないということを確認する効果。

ウ 普段から優しい性格の岩較くんが、今日は大好きな牛と触れ合う中で一段と優しい態度であることをはっきりと伝える効果。

エ 一般に動物を育てている人は優しい人が多いというが、とりわけ岩較くんは優しい人柄であるということに影響づける効果。

問3 傍線部②「それから、唇を尖らせて、『マコちゃんも触ってみ』と、少しぶつきたらうな口調になった」とありますが、ここから岩鞍くんのどのような気持ちを読み取れますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 牛の持つ優しさを真子にも分かってもらいたい気持ちで話していたが、思いがけず自分自身の牛への愛情を指摘され、うれしくも気恥ずかしい思いで話題を牛に戻したいと思っている。

イ 牛について書いた作文が金賞であったことを誇りに思っていたが、そのことを自慢しているように真子に受け取られた気がして恥ずかしく、なんとかして話題を変えたいと思っている。

ウ 自分が牛をととても可愛がっていることは伝わったが、牛のことが好きだなんて変わっていると真子にあきられてしまったことが恥ずかしく、話題をすりかえてごまかそうと思っている。

エ 自分がどれほど牛を可愛がっているかを話して満足していたが、真子が興味もない話題に話を合わせているだけだと気付き、恥ずかしさがこみあげてきたので話題をそらしたいと思っている。

問4 傍線部③「尋ねて直ぐに、心臓が縮こまった」のはなぜですか。その理由を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大切に育てていたガンコが売られていった寂しさや悲しさを抑えているであろう岩鞍くんに、無遠慮な質問をしてしまった自分を軽率に感じたから。

イ 大切に育てていたガンコが売られていった寂しさや悲しさを抑えているであろう岩鞍くんに心ない質問をして、傷つけてしまった自分に嫌気がさしたから。

ウ 大切に育てていたガンコが売られていった寂しさや悲しさを抑えているであろう岩鞍くんに不意な質問をして、不快にさせてしまったことに気付いたから。

エ 大切に育てていたガンコが売られていった寂しさや悲しさを抑えているであろう岩鞍くんに、配慮のない質問をしてしまったことを責められると思ったから。

問5 空欄Xに入る最も適切な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 澄んだ イ 濁った ウ 湿った エ 乾いた

問11 傍線部⑨「岩鞍くんも鮎美も動かない。固まっている」とありますが、この時の二人の気持ちの説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 真子への好意を指摘すれば林葉くんがおとなしくなると思っていたが、強い口調で否定され、あてが外れて困っている。

イ 真子の母親をさげすむような林葉くんの言いざまは許しがたいが、真子を傷つけずに言い返す言葉が見つからず、とまどっている。

ウ 真子のことは自分たちの方がよく知っていると思っていたが、意外にも自分たちの知らない事実を林葉くんに告げられて、驚いている。

エ 林葉くんの言っていることが作り話であることはよく分かっているが、大きな声で乱暴にまくしたてるので、圧倒され気後れしている。

問12 傍線部⑩「奈央さんの頬に血の気が上がった。紅潮した顔が俯く」とありますが、この時の奈央さんの気持ちを説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 真子が乱暴なことをしたのは、新しく母親になった自分との関係が良くないためではないかと遠回しに指摘され、腹立たしいが、良い母親となるような努力をしていないので否定できず、がっかりしている。

イ 真子が乱暴なことをしたのは、新しい母親である自分の愛情の不足が原因ではないかと指摘されたように感じ、激しい怒りを感じたものの、考えてみれば本当にその通りだと思い直し、恥ずかしさがわき上がってきている。

ウ 真子が乱暴なことをしたのは、友だち関係のストレスが原因であることに普通の母親であればすぐに気付くはずだと嫌味を言われ不愉快であるが、実の母ではない自分には育てる資格がないとも思え、自信を失くしている。

エ 真子が乱暴なことをしたのは、新しい母親である自分の存在が原因であろうと暗に責められた上、過去の職業に対する侮辱の意味合いも感じられて悔しいが、加害者側である自分から言い返すこともできず、ひたすら我慢している。

問6 傍線部④「そんな会話」とはどのような会話ですか。「そんな」と「会話」の間に補う言葉として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア おさない イ ぎこちない ウ そつけない エ とるにたりない

問7 次の文章は傍線部⑤「岩鞍くんは、かんかん橋に似ている」について説明したものです。空欄A・Bに入る適切な表現を本文中から指定の字数で抜き出し、答えなさい。また、空欄Cに入る適切な二字の熟語を自分で考えて答えなさい。

「かんかん橋」は、この話の舞台となっている津雲の出入り口に位置している橋の名前であり、真子のはかんかん橋を「A(七字)存在だと思っている。それは異性を意識し出す中学生になっても「B(十二字)関係である岩鞍くんと通じるものがあり、そのような岩鞍くんは真子にとって「かんかん橋」とともに「C」感を抱かせるものと言える。

問8 傍線部⑥「鼓動が動悸に変わる」とは、真子の気持ちがどのように変化したことを表現していますか。理由も含めて具体的に説明しなさい。

問9 傍線部⑦「真子は俯き、上履きの先を見詰める」とありますが、こうした態度をとる真子の性格を表した言葉を、傍線部⑦から傍線部⑨までの本文中から五字で抜き出し、答えなさい。

問10 傍線部⑧「どんと後ろ頭を叩かれた気がした」のはなぜですか。その理由を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 堂々と林葉くんに立ち向かっていく鮎美から、かつて鮎美の力になれなかった自分のことを責められている気がしたから。

イ 林葉くんに立ち向かい、自分のことを「うちの友だち」だからとかばってくれる鮎美の堂々とした姿に衝撃をうけたから。

ウ 林葉くんに立ち向かってきている鮎美を見て、かつて鮎美の力になれなかった自分が借りを作ってしまったように感じたから。

エ 「承知せんで」と林葉くんに立ち向かっていく鮎美の姿を見て、はじめて見る鮎美の迫力ある態度に圧倒され、目をみはったから。

問13 傍線部⑪「それを何で親や先生に言わんのや」とありますが、この時の林葉くんの気持ちを説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 真子の乱暴の原因は奈央さんの悪口を言った自分にあるのに、真子ばかりが責められているので、真子の罪までも自分がかぶり男らしさを見せたいと思っている。

イ 口げんかの勢いに任せて自分が奈央さんの悪口を言ってしまったのに、真子はその事実を言わないので、かえってやり場のない罪悪感をつのらせ、いらいらしている。

ウ 口げんかの時に言った奈央さんについての悪口の内容は事実であり、そのことを真子が親や先生に言ってくれば、奈央さんの悪いわさが広がって自分の思うつぼだと思っている。

エ 真子の乱暴の原因を何も知らない母親が、被害者意識たっぷりに真子の両親を責めているので、自分が言った奈央さんの悪口が後で出るみに出るとかえって不都合だと気になっている。

問14 傍線部⑫「ほんの一時でも、（ ）知られたくない」とありますが、「ほんの一時でも、奈央さんのことを恥ずかしいと思っ」ている真子の気持ちが最もよく表れている一文を、中略部(7ページ上段)以前の本文中から十五字で抜き出し、答えなさい。

問15 次のア～エについて、本文の表現の特徴を説明したものと誤っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 表情の動きを丁寧に描くことで、登場人物たちの気持ちの変化を細やかに表現している。

イ 情景描写を多用することで、登場人物たちの生活している場所をイメージしやすくしている。

ウ 回想場面を途中に織り交ぜることで、登場人物たちの関係や人物像をとらえやすくしている。

エ 会話を中心に物語が展開し、また擬音語を効果的に用いることで物語に臨場感を与えている。

国語

解答用紙

受験番号

得点

※

※	※	※	※	※	※	※
---	---	---	---	---	---	---

問1	問2	問3	問4	問6	問7	問8
a	①			(1)	A	B
イ ッ カ ク	③		問5			
b				(2)		
シ シ ヨ ウ	⑧					問9
c						問10
ニ ナ						
(う)						

一

※	※	※	※	※	※
---	---	---	---	---	---

問1	問2	問5	問7	問8	問9	問14	問15
a			A				
シ ユ ッ カ	問3	問6					
b					問10		
潔	問4						
(い)			存在		問11		
					問12		
			関係				
			C				
					問13		
			感				

二